

# 「文学と都市」についての考察 (1)

— レイモンド・ウィリアムズの場合 —

A Study of “Literature and the City” (1) :  
The Case of Raymond Williams

楚 輪 松 人

Matsuto SOWA

## はじめに

21世紀も最初の10年間を終え、19世紀〈小説の世紀〉には活字文化の王者であった文学も、20世紀〈映像の世紀〉に登場した映画やテレビにすっかり取り込まれ、その19世紀的な使命（教化と娯楽の提供）においては、それら後発の文化装置にますます遅れを取っている。果たして、文学は、その使命をことごとく終えたのだろうか。

また、現代は、都市化という現象が、グローバル化の波と共に、急ピッチで、しかも世界中で展開されている時代でもある。しかし、よく考えてみれば、都市化の問題は、いつの時代にも、世界中で出現する問題であり、新しい都市はそれぞれの時代の新しい文学によって表現されてきた。古今を通じて存在する、文学と都市の関係である。換言すれば、文学の未来は都市が向かうところにあるとも言える。都市の未来は何処にあるのか。高度情報化社会時代の、高密度で進行中のグローバル化がもたらす都市にふさわしい、新しい文学は如何なる使命を担うのか。また、文学批評において、文学と都市の問題は、どのように表象されて来たのだろうか。

英文学研究において、文学と都市に関する

最も本格的な研究は、レイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams, 1921-88) をもって嚆矢とする。以下の拙論では、ウィリアムズの考察、その物ずばりを言い当てる「文学と都市」(“Literature and the City”)と題されたエッセイについての解説とその翻訳を試みる。尚、ウィリアムズ以降の文学と都市をめぐる英米の研究については、稿を改め、「文学と都市」についての考察 (2)」と題して、Burton Pike (1981), Michael C. Jaye and Ann Chalmers Watts (1981), Edward Timms and David Kelley (1985), William Chapman Sharpe (1990), Dana Brand (1991), Hana Wirth-Nesher (1996), Richard Lehan (1998), Robert Alter (2005) らの業績を書評エッセイの形で執筆する予定である。

## 1. レイモンド・ウィリアムズについて

何故、レイモンド・ウィリアムズなのか。いま、その著作に注目すべき理由は何なのか。言うまでもなく、このイギリス生まれのマルクス主義批評家は、20世紀後半、時代が憧れた〈知の巨人〉であった。まず、『辺境』(Border Country, 1960, 邦訳：小野寺健訳、

講談社, 1972) や『第二世代』(*Second Generation*, 1964) をはじめとして、多くのすぐれた小説を著した作家であった。次に、批評家としてのウィリアムズは、現在、<sup>カルチュラル・スタディーズ</sup>「文化研究」として我々が知っている学問分野の創始者として、いまやホガート(Richard Hoggart, 1918-) やトムスン(E.P. Thompson, 1924-93) と並んで、「文化研究」の御三家として、伝説の人物となっている。また、「文化研究」の源流といわれるイギリスの「ニューレフト」の黎明期の中心的な靈感源であった。

その故か、ウィリアムズは、時として、イギリスの「ルカーチ」(György Lukács, 1885-1971), 「ブロック」(Jean-Richard Bloch, 1884-1947), あるいは、「サルトル」(Jean-Paul Sartre, 1905-80) とさまざまに形容される。ハーバーマス(Jürgen Habermas, 1929-) の初期の公共圏の理論はウィリアムズの『文化と社会』(*Culture and Society*, 1963) に由来するとも言われる。また、サイド(Edward W. Said, 1935-2003) はウィリアムズから多くを学び、<sup>ニュー・ヒストリシズム</sup>「新歴史主義」のカリスマ的指導者、<sup>グレル</sup>グリーンブラッド(Stephen Greenblatt, 1943-) は、ケンブリッジ大学留学中、ウィリアムズの講義の受講生でもあった。ジャマイカ生まれのイギリスの文化理論家スチュアート・ホール(Stuart Hall, 1932-) もその知的形成期における主たる影響力としてウィリアムズの名を挙げている。ウィリアムズについての肝心な点は、エチオピア系のアフロ・アメリカン、ウェスト(Cornel West, 1953-) が1992年の*Social Text* (No. 30) に寄せた「追悼文：レイモンド・ウィリアムズの遺産」(“In Memoriam: The Legacy of Raymond Williams.”) の冒頭の言葉に尽きるかもしれない。「レイモンド・ウィリアムズは、ヨー

ロッパの時代の終焉(1492-1945)以前に生まれた、偉大なヨーロッパ人最後の男性の革命的社会主義者の知識人であった」(“Raymond Williams was the last of the great European male revolutionary socialist intellectuals born before the end of the age of Europe (1492-1945).” West 6)。(このウェスト「追悼文」は1995年のChristopher Prendergast編集の*Cultural Materialism: On Raymond Williams* (pp. ix-xii) に再録されている。)

レイモンド・ウィリアムズ。20世紀の「マルクス主義批評家」(Watkins 933-46)の中で、最も重要と目された批評家の功績の詳細については、その死の翌年の1989年、*Critical Inquiry* (Vol. 15, No. 4) に寄稿されたSimon Duringの論文“After Death: Raymond Williams in the Modern Era” (pp.681-703) という論考や、没後4年後の1992年の*Social Text* (No. 30, 1992) が特集号が参考になる。収録された論考の著者と論題だけを紹介すれば、Christopher Prendergast, “Emergings: Raymond Williams, 1992” (pp.3-5), Cornel Westの前述の「追悼文」“The Legacy of Raymond Williams” (pp. 6-8), David Simpson, “Raymond Williams: Feeling for Structures, Voicing ‘History’” (pp.9-26), David Lloyd and Paul Thomas, “Culture and Society or ‘Culture and the State’?” (pp.27-56), Michael Moriarty, “The Longest Cultural Journey: Raymond Williams and French Theory” (pp.57-77), Catherine Gallagher, “Raymond Williams and Cultural Studies” (pp.79-89), Stanley Aronowitz, “On Catherine Gallagher’s Critique of Raymond Williams” (pp.90-97), Andrew Ross, “Giving Culture Hell: A Response to Catherine Gallagher” (pp.

98-101) である。また、わが国では、2006年3月、『英語青年』(Vol. 151, No. 12) が、5編のエッセイをもってウィリアムズを特集した。これらの国内外の論考を読めば、ウィリアムズが「過去の人」ではなく、現在も尚、影響を行使する稀有な批評家であることは明らかである。

## 2. 「文学と都市」について

ウィリアムズの都市文学についての随筆<sup>エッセイ</sup>、「文学と都市」(“Literature and the City”)は、1967年の英国放送協会[BBC]のラジオ番組「サード・プログラム(Third Programme)」で放送されたものである。これが先に放送された対<sup>ペア</sup>の番組、「文学と田舎社会」(“Literature and Rural Society”)と一体となつて、やがてウィリアムズの1973年の名著、文学と都市に関する最も本格的な記述の一冊、『田舎と都会』(*The Country and the City*, 邦訳: 山本和平・他訳, 晶文社, 1985)に結実する。『田舎と都会』は「イングランドにおける田舎と都市の相互関係をめぐる議論」(Said 98)であり、古代の文学からポストコロニアル文学まで、英米の文学作品を材料として、マルクス主義や文化物質主義<sup>カルチュラル・マテリアリズム</sup>の観点から、文学と社会の関係を複合的に分析した研究である。また、『田舎と都会』は、『文化と社会』(*Culture and Society*, 1963)や『長い革命』(*The Long Revolution*, 1961)と同様、ウィリアムズの個人的体験に基づいた研究であることがその大きな魅力となっている。英文学研究、また文化研究における『田舎と都会』の重要性はいくら強調しても強調しすぎることはない。そしてその起源となった記念すべき2つのラジオ番組、2週にわたってBBCの週刊誌『リスナー』(*The Listener*, 16 & 23 Nov. 1967)に掲載されたそのテキストはいまでも読める。(以下の

「文学と都市」の翻訳にはこのテキストを使用した。また、翻訳に際しては、引証資料にも挙げた二つの先行研究、西田氏の『英語研究』誌上の訳注(原文が一部脱落しているので要注意、及び山本氏他の翻訳『田舎と都会』(1985)を参照させていただいたことを感謝してここに明記する。)

都市に限らず、農村であれ、あるいは砂漠であれ、文学の読書体験を通して、「自分の生きる環境とは何か」と問いかければ、それは「エコ批評」となる。環境と文学との間に新たな関係が築かれつつある現在、いまから約半世紀前の1967年、文学と都市の関係を探求したウィリアムズの「文学と都市」は、21世紀の文学と環境、特に都市の問題を考察する上で示唆に富むテキストである。以下、そのエッセイにおいて、ウィリアムズが指摘する重要なポイントを列挙してみたい。

まず第一に、都市は、政治・経済・芸術の中心であるがゆえに、「都市」ということばは言語[英語]の中で最も喚起力のある語であること。

第二に、<sup>イングランド人</sup>英国国民は、19世紀の中頃にはすでに世界初の「都市国民」となっていたこと。

第三に、現代文学の作者は、もはや自信に満ちた観察者ではなく、街路を徘徊する孤独な存在であり、行き交う人はすべて、彼にとって、神秘であって、それら正体不明の存在と遭遇して、作者は、不安が繰り返されているうちに、自分自身の存在さえ見失い、伝達能力さえ失っていること。

第四に、現代都市の逆説<sup>パラドックス</sup>は、他者の存在を最も強く意識するはずの場所、歴史的に見れば、交換と伝達の場所に他ならぬ都市そのものにおいて、人は最も孤独を感じるということ。

第五に、文明にとって、都市はあまりに中心的な存在であるが故に、文明が存在し続け

る限り、都市の概念には限りがないこと。

以上のことを論じるにあたり、ウィリアムズは9人の作家（詩人・小説家）の作品を取り上げる。登場順に記せば、William Wordsworth (1770-1850), T. S. Eliot (1888-1965), William Blake (1757-1827), Thomas Hardy (1840-1928), Elizabeth Gaskell (1810-65), Charles Dickens (1812-70), George Eliot (1819-80), George Gissing (1857-1903), H. G. Wells (1866-1946) の9人である。いずれも「<sup>ウエスタン・キャノン</sup>西 欧の正典」を形成する作家の「<sup>キャノンニカル</sup>正典的」テキストのすぐれた文学批評となっている。

ウィリアムズの方法は、テキストを作品の舞台である都市との関係に光を当てながら、都市と文学の相互作用を<sup>スタンス</sup>読解する立場の批評である。ロンドンやダブリンといった実際の都市の分析というよりも、あくまでも作家の想像力が捉えた都市、現実と虚構の融合した文学における非在の都市、そして作家の都市体験の分析が主眼となる。思うに、ウィリアムズにとって、「関係」や「結びつき」ということばは、最重要のキーワードであるが故に、この短いエッセイにおいても、都市における不可視の人間関係を顕在化させたディケンを特筆しているのはまったく理にかなったことなのである。

### 3. 翻訳

レイモンド・ウィリアムズ「文学と都市」

[1] 都市は、何千年もの間、存在してきた。無論、都市から文明の概念が生まれる。都市は、芸術と学問の、発明と交換の中心として、人類の進歩を担うものであった。また、権力の中心、社会秩序・税制・誇示的消費の中心でもあった。都市と、都市の周辺にあって都市を支える農村との間には、昔から対立関係が存在した。田園は無垢で、田舎の生活には

自然の美德がある、という考え方に対して、都市は、慌ただしく、華美で、俗悪であると考えられた。その区別はいつも曖昧であったが、明確に認識する者も存在した。例えば、ウェストミンスター橋の上に立つウィリアム・ワーズワス [1770-1850] である。

Earth has not anything to shew more fair:

Dull would he be of soul who could pass by

A sight so touching in its majesty.

[William Wordsworth, "Composed upon Westminster Bridge, Sept. 3, 1802."]

この世でこれほど美しいものはない。

荘厳にして心打つこの眺めを

立ちどまることなく素通りできるのは魂の鈍い人である。

[ウィリアム・ワーズワス「ウェストミンスター橋上にて 1802年9月3日」]

これは一日の喧噪が始まる前の都市の光景だが、その認識は正しい。文明の建築物、都市が秩序だった人間の力の中心<sup>ハート</sup>であるという感覚は、「都市」という語を英語という言語の中で、最も喚起力のある語にしている。興味深いのは、この引用がワーズワスからのものだということ、すなわち、都市が新しい意味<sup>ワード</sup>を帯びようになったのは、彼が詩人として生きた時代、産業革命が進行中の時代だということである。西暦1800年、人口5,000人以上の街に住んでいた人間は世界人口のわずか3%に過ぎなかった。今日では、それが世界人口のほぼ1/3であり、その率は依然として増加しつつある。ロンドンでは、ワーズワスが目の当たりにしていたとき、目を見張るような成長を始めていた。人口はすでに100万を越え、19世紀の終わりには650万人以上であった。ワーズワスの後半生では、造船場、家具工場、仕立て屋が、イーストエンドの商工業地区という新しい現象を創造していた。19世紀の中頃には、イギリス人はすでに世界最初

の都市国民になっていた。

[2] こうした変化を生き、理解しようとして、作家たちは、昔ながらの田舎と都市の対立という観点を利用した。田舎の生活という考え方が、都市の工業化を批判する方法とてますます用いられた。都市の概念そのものも変化した。工業化や人口増加・衛生・交通・住宅問題などの恐ろしく新しい問題だけでなく、独自の明白な存在のために、一つの新しい社会現象が注目されるようになった——群衆である。無論、時代は、新しく、力強い民衆運動の時代でもあった。中産階級の観察者の間には、権力の明らかな中心となる都市の群衆——暴徒——が、やがて力を得ることを恐れる十分な政治的理由があった。しかし、この時代の新語には、もう一つの感情が表現されていた。「大衆」とは、個人としての正<sup>マス</sup>体<sup>アイデンティティ</sup>を失った、無名の社会的有機体と化した人々という感覚である。次の引用は、先のワーズワスのウェストミンスター橋とは別の、ロンドンの橋の上にいる後の世代の詩人の感情——『荒地』の詩人、T.S.エリオット [1888-1965] の感情である。

Unreal City,  
Under the brown fog of a winter dawn,  
A crowd flowed over London Bridge, so many,  
I had not thought death had undone so many.  
Sighs, short and infrequent, were exhaled,  
And each man fixed his eyes before his feet.

[T. S. Eliot, *The Waste Land*, 1922]

非有の都市

冬の夜明けの褐色の霧の下を

人の群れがロンドン橋の上を流れて行った、おびただしい人の数だ、

こんなにおびただしい人数を死が亡くしたとは夢にも知らなかった。

思い出しては短く息を吐いて

めいめいとその足元にじっと眼を据えていた。

[T. S. エリオット, 『荒地』]

[3] これは、手遅れの、疲れ切った感情である。しかし、私が述べてきた反応に関係するものである。権力と華美と発明の中心としての都市の感覚だけでなく、無定形で、人間のつながりを失わせ、人を閉じ込める何かとしての都市の感覚である。それはウィリアム・ブレイク [1757-1827] の「ロンドン」という詩の中にある。

I wander thro each charter'd street  
Near where the charter'd Thames does flow,  
And mark in every face I meet,  
Marks of weakness, marks of woe.

[William Blake, "London"]

特別認可のテムズ川のほとり

特別認可の街路を歩く……

行き会う人のどの顔にもわたしは認める、

衰弱の兆し、嘆きの徴を。

[ウィリアム・ブレイク「ロンドン」]

それぞれの「特別認可の (charter'd)」街路、「特別認可の (charter'd)」テムズ川。ブレイクは最初「汚れた (dirty)」という形容詞を用いていた。それはそれで意味は明白だったと思う。しかし、ブレイクが書き直した「特別認可の」という形容詞は都市の新しい様相をより一層明らかに表現する。新しい社会目的のために、命令が下されたい、その住人を墮落させ、幽閉する都市である。この様相を、恐らく一番最初に見てとったのがワーズワスの『序曲』 [1805] 第七巻の「ロンドン滞在」の一節である。

O Friend! one feeling was there which belong'd  
To this great City, by exclusive right.  
How often in the overflowing Streets,  
Have I gone forward with the Crowd, and said  
Unto myself, the face of every one

That passes by me is a mystery.

[Wordsworth, *The Prelude*, Bk. 7]

おお友よ、この大都会だけにしかない  
ひとつの感情があったのだ。

いかにしばしばわたしは人であふれる通りを、  
群衆とともに歩きながら呟いたことか、  
傍らを通り過ぎる一人一人の顔が  
じつに神秘<sup>ミステリー</sup>に満ちている。

[ワーズワス『序曲』第七巻]

これは、もはや都会にやって来た人が感じるような驚きの感情ではない。それは、道を歩いている途中で出会う人が、直接、間接を問わず、みんな顔見知りであるような田舎から来た人が都市で経験する感情である。彼らは、都市へやって来て、未知の人々の世界に直面し、自分自身の正<sup>アイデンティティ</sup>体さえわからなくなってしまう。その時、私たちは、ワーズワスが続けているように、苛立つ、一般化された反応を聞き取ることができる。

O, blank confusion! and a type not false  
Of what the mighty City is itself  
To all except a Straggler here and there,  
To the whole Swarm of its inhabitants . . .  
ああ、まったくの混乱!

そこかしこの落伍者は別として

ここに住む大勢の住人のすべてにとって

まさこの巨大な都市そのものの象徴<sup>タイプ</sup>なのだ。[同上]

このような産業、新しい大都市の様相を描くには、農村出身の作家、都市とはまったく異なった社会的条件の下に成長した作家に頼らなければならない、ということは重要なことである。次の引用は、[1879年のロンドン市長就任披露パレードを描写した]トマス・ハーディ [1840-1928] である。

As the crowd grows denser it loses its character of an aggregate of countless units, and becomes an organic whole, a molluscous black creature having nothing in common with humanity, that

takes the shape of the streets along which it has lain itself, and throws out horrid excrescences and limbs into neighbouring alleys; a creature whose voice exudes from its scaly coat, and who has an eye in every pore of its body. [Florence Emily Hardy, *The Early Life of Thomas Hardy*. New York: The Macmillan Company, 1928]

混み合ってくるにつれて、群衆には無数の個人の集合という性格がなくなってくる。それは一個の有機体となり、人間性とは何の共通性もない、一匹の黒い軟体動物となる。そいつは通りのかたちなりに身を横たえ、恐ろしい<sup>いぼいぼ</sup>疣々や肢を近くの小路に突き出す。おまけにこの生物は鱗状の皮から声を出し、身体中の孔という孔に眼があるのだ。[フロレンス・エミリー・ハーディ『若き日のトマス・ハーディ』(1928)]

ハーディの心配は、極端で、喜劇的でさえある。しかし、特徴ある種類の心配で、見ている人は群衆を、敵、あるいは獣と見なしている。このような見方は、さまざまな想像力豊かな形で現代文学に影響を与えている。それをもっと説得力のある観察から解き離すことは難しい。同じ作者ハーディにあるように。

London appears not to *see itself*. Each individual is conscious of *himself*, but nobody conscious of themselves collectively, except perhaps some poor gaper who stares around with a half-idiotic aspect. (Italics original)

ロンドンはどうやら自分がわかっていないようである。誰も彼も自分自身を意識している。だが一人として集団としての自分たちを意識している者はない。ただ、恐らくは白痴みたいな顔をして、口をあんぐりと開け、あたりをきょろきょろ見回している哀れな人物は別として。[同上]

この哀れな白痴みたいな人物は、必然的に、「お上りさん」だと想像されることになる。

[4] イギリスで都市化が、急速に、大規模に、優先的に行われたことを考えれば、19世紀の作家の多くが、本質的には、田舎の人間であったことは注目に値する。エリザベス・ギaskell [1810-65] の作品は、当時の何千という人々の田舎から街への移動の好例である。『メアリ・バートン』[1848] の冒頭、都市に引っ越した第一世代の市民が日曜日になると郊外を歩く描写は説得力のある描写である。

彼女は、恐らく素朴かもしれないが、ある点では、産業都市での生活について問題の核心を衝いている。そんなに大きく、複雑で、慌ただしい大都会に住んで、他人の困窮や性質がどうしてわかるというのだろう。彼女が提起しているのは、人道的・政治的な問題であり、そういう問題がこの種の文学で、伝統的な表現で提起されているのである。

しかし、ちょうどこの時期、彼女の他にも書いている作家がいた。もはや、農村のイメージを見慣れた、都市の慌ただしさや匿名性をただ傍観している観察者ではなく、別の種類の、驚くべき独創性オリジナリティに富んだ作家である。その独創性は次の点にある。都市こそ、彼にとって、あるべき人間的環境であり、だからこそ、新しい観点と書き方に立った文学が必要とされていると考えた点である。もちろん、ディケンズ [1812-70] のことである。

[5] ディケンズの小説のプロットと人物の問題を考えてみよう。そのプロットはいわゆる恣意的な偶然の一致や、信じがたい発見に満ちている。ちょうど人物が、しばしば、変化のない、単一の、誇張された人物——しばしば戯画カリカチュアと呼ばれるものであるように。ある読者はこれらを明らかな欠点と考える。恐らく、彼のいわゆる驚くべき活力エネルギーを斟酌すれば許されるべきものであろう。しかし、彼の活力とこの方法は不可分である。ディケンズ

の強烈で、複雑な世界は、こうしたプロットや人物にもかかわらず、というのではなく、それらを通してはじめて生まれたのである。ディケンズは、こうした伝統的な方法を受け継ぎ、発展させた。ジョージ・エリオット [1819-80] のように、特定の地方で観察される行為、格別に認識された個人、注意深く識別された人間関係の成長を段階的に表現するのではなく、ディケンズ独自のやり方で、都市生活の経験ユエーブを、独得に表現するという劇的な方法に変貌させたのである。というのも、ディケンズの小説を一步離れて見たとき、まず全般的な動きとして読者が覚えているのは、やたらとせわしなく、一見したところ、男女がでたらめに行き交い、いずれも決まった表現で話し、決まった表情をしているという感じである。これは、本質的には、通りを過ぎ行く人を見るときの見方である。はじめは、ごく当たり前の関係もなければ、関係の発展もない。これら男女は関係するというよりは、互いにすれ違うだけで、時には衝突することもあるが、それだけのことである。しかし、これもはじめのうちだけで、物語が進行するにつれて、それまで知られていなかった、認められていなかった関係、深遠で決定的なつながりが、言わば、読者の意識の中に押し入ってくる。どんな人間社会にあっても、本物の、避けることのできない関係、つながりである。そうしたものは、都市という、この新種の人間の社会秩序が持つ、まったくの慌ただしさ・騒音・雑多性によって、曖昧にされ、複雑にされ、謎めいたものにされるのである。意識の中にこういった関係や感覚を持ち込むことが、実際、ディケンズの小説の目的である。ちょうど、それが彼の社会と人間を見る彼の幻ヴィジョンの中心にあるように。

Oh for a good spirit who would take the house-tops off, with a more potent and benignant

hand than the lame demon in the tale\*, and show a Christian people what dark shapes issue from amidst their homes, to swell the retinue of the Destroying Angel as he moves forth among them. For only one night's view of the pale phantoms rising from the scenes of our too long neglect... [Dickens, *Dombey and Son*, Ch. 47]

ああ、願わくば、善き霊の立ち現れ、かの物語の跛行の悪魔よりも、力強き優しき手で、家々の屋根を引き剥がし\*、キリスト教徒に、どれほど多くのもののけが、彼らの家のただなかから繰り出し、街を練り歩く〈死の天使〉に加わって従者の列を膨れ上がらすかを目の当たりにさせんかな。ああ、願わくば、一夜なりと、それら蒼白き亡霊が、あまりに長き間、なおざりにしてきし怠慢の舞台から立ち現れるさまを垣間見させんかな。[『ドンビー父子』第47章]

【\*訳注】フランスの小説家・劇作家、ル・サーージュ(1668-1747)の世相諷刺小説『跛行の悪魔』(1707)の主人公アスモデが、幽閉の身から救ってくれた青年貴族との約束通り、首都マドリッドじゅうの屋根を引き剥がして、この世の悪徳を暴いてみせる場面を踏まえた表現。

この「力強き優しき手」は小説家の手である。自分自身を見ているディケンズである。この祈願の言葉が、『ドンビー父子』で、都市の描写がなされるのと同じ章に置かれていることは重大である。同じ第47章で、ディケンズは、都市に垂れ込める濃い黒雲のイメージを用いて、無関心で、不自然な社会が、人間的・道徳的にどんな結果を生み出すかを描いているのである。

[6] これは、ディケンズのもう一つの<sup>オリジナリティ</sup>独創性である。彼は、普通、外から見ただけではわからない社会制度や世態を、それらがまるで人間や自然現象であるかのように劇的に描く

ことができた。時には、人々がお互いを探し求めてその中を手探りして進んでいる黒雲、あるいは霧として。時には、生活様式が具体的な形を帯びた「迂達省[たらい回し局・やらない課]」、あるいは「<sup>ブリーディング・ハート・ヤード</sup>血のしたたる心臓の庭」横丁として。時には、『相互の友』の「株」のように、登場人物に等しいものとして。無論、このようなディケンズの見方は、登場人物に道徳的な含みのある名前を付けることとも結びつく。グラッドグラインド、マッコークカムチャイルド、マードルなどがそれである\*。

【\*訳注】グラッドグラインド(Gradgrind)は、『ハード・タイムズ』[1854]の登場人物。その名前には“grind”(すり砕く、すりつぶす)という語が連される。尚、“gradgrind”は「心の冷たい実利主義者」という意味の普通名詞になっている。マッコークカムチャイルド(McChaoakumchild)も同小説の登場人物。その名前は“pick oakum”(まいはだ [=古麻などを撚り合わせタールなどを染み込ませたもので木造船の張板などの間に詰めて漏水を防ぐためのもの]を作る《昔の囚人などの仕事》; 苦役で服する)という成句となっている“oakum”という語と視覚的な連想が働く。同時に、“choke child”(子どもを窒息させる)という音の連想も自然に働く名前である。マードル(Merdle)は、フランス語の“merde”(糞・くそ)の音が連想される語である。

それはまた、名前ほど明白ではないにせよ、再び都市特有の観察と結びつく。都市で一番明白にそれとわかる住人は建物であるという、言ってみれば一つの認識である。建物の外見と形、そしてそこに住む住人との間にはつながりと混乱がある。『リトル・ドリット』[1855-57]から、次の引用を見てみよう。

Like unexceptionable society, the opposing rows of houses in Harley Street were very grim with one another. Indeed, the mansions and their inhabitants were so much alike in that respect, that the people were often to be found drawn



up on opposite sides of dinner-tables, in the shade of their own loftiness, staring at the other side of the way with the dullness of the houses. . . [Dickens, *Little Dorrit*, Bk. 1, Ch. 21]

申し分のない社交界のお歴々と同じく、ハーリー街の両側に並ぶお屋敷はお互いに愛想が悪い。この点ではお屋敷の住人とその住人はよく似ていて、晩餐会のテーブルの両側に並ぶお偉方は、自分自身の態度のお高さの影に隠れてしまい、お屋敷と同じ仏頂面を向い側を睨みつけているものだ。[第1部第21章]

都市で起こったことについての、皮肉に満ちた、常習的な見方は、このようにして、しばしば直接的で観察可能な行為へと変えられる。『ドンビー父子』で見られるような、無関心なひとごみの中において、孤独で、助けを必要としていることを痛感し始めるあの経験である。

Where to go? Still somewhere, anywhere? Still going on; but where! She thought of the only other time she had been lost in the wild wilderness of London—though not lost as now—and went that way. The home of Walter's uncle. . . [Dickens, *Dombey and Son*, Ch. 48]

どこに行ったらよいのか。まだどこに行くあてもない。ただ進んでいだけだ。でもどこにしよう。フロレンスは前に一度だけロンドンの広漠たる荒野で迷ってしまったときのことを思い出した。

[ディケンズ『ドンビー父子』第48章]

私はこの都会のにぎやかな通りで孤独を感じるという経験に戻って来た。なぜなら、それが一番よく知られ、一番書かれ、それでいて最も単純な都市生活の経験だからである。ディケンズの主要な業績はそれを越えたところにある。都市の条件として、都会における孤独は誰しも経験するところであるから、それは第一に心理的ではなく社会的事実だという中心的事実として把握したのである。この区別

は、その後の小説の発達にとって、最大限の重要性を持つものである。ワーズワスやハーディが、都会の群衆に注目したとき、彼らは孤独な個人を等質の群衆に変換する傾向があった。一般化した考え方である。自分が大衆社会と考えているものの中を動きながら、それを強烈に意識しながらも孤独な個人である。

[7] この経験は想像的な文学に力強く記録されてはいるが、客観的に存在するかのように変換されて描かれている。いわゆる大衆社会というものはあたかも自明の事実で、また大衆と呼ばれるものも客観的な測定可能な存在でもあるかのように。この結論を押し進めることができたのは、多くの作家が、そのような現実の対象や場面から身を引いて、観察する力を持っていたからである。ワーズワスやハーディなど、初期の作家の場合には、静かで、それほど複雑ではない田舎へ退き、また後代の作家の場合には、効果的な社会階級の中へ身を退いて、人と物、本物の個人——私たち自身のような人間——と他者、すなわち大衆とを根本的に区別した。ジョージ・エリオットとハーディにおいては、小説が基盤としていたのは、お互いが顔見知りの共同体、すなわち村や小さな町であった。しかし、イギリス人の生活がますます都市化されるにつれて、現実の簡素な共同体は姿を消して、作家にはますます利用できないものになっていた。このために人工的な解決法があった。船上とか列車の客車内で偶然一緒になった、偶然にも孤立した集団の設定である。

しかし、もっと特徴的な解決法は階級の撤回である。小説家にとっては、取り扱う社会を自分自身の属する種類や境遇に人物を限定することである。現代のカントリー・ハウス小説はこの種の解決法の完璧な具体例である。というのは、いかなる意味でも、このカント

リー・ハウスは周囲の土地と関係のあるカントリー・ハウスではないからである。にもかかわらず、人々が選ばれ、結びつけるこの集団において、それは都市の雑多性・慌ただしさ・騒音から撤退しているのである。

しかし、ディケンズにとっての問題は、彼には都市以外に他に行き場がなかったということである。人は、男も女も、都市でお互いを知ること学ばなければならない。さもなければ、何も学ばないかである。ディケンズから直的的な影響を受けたイギリス人作家を見れば、実際、幾つかの衰退がある。例えば、ジョージ・ギッシング [1857-1903] がその例である。ディケンズほど寛容ではないが、その資格は重要である。

[8] ギッシングが、『下の世界』[1889]で、都市を見るとき、ディケンズが見たように、黒い雲、社会の伝染病を見る。しかし、ディケンズのような寛容な怒りをもって、雲が隠している人々や変更可能な社会の条件に迫るわけではない。代わりに、都市を苦々しく、悲観的に見ている——敏感な個人は、何とかそこから逃れなければならない墮落した人間である。H. G. ウェルズ [1866-1946] は違っている。彼の空想科学小説の主な源は、感情面では、目に見える複雑さや混乱に対する、じれったい、時には寛容で、時には黙示録的な、反応である。都市の複雑な問題を解決する快刀乱麻として、革命的解決法かもしれないが、外から地球をおびやかすものをウェルズは表現した。彗星がやってきて、日常生活を破壊する。あるいは、未来を設定すると、それは現在と掛け離れた未来である。しかし、同時にまた、ウェルズは、新しい社会生活で人間がどう変わるか、その結末を生き生きと観察した。例えば、次の都市の結婚式の描写にあるように。

The irrelevant clatter and tumult gave a queer flavour of indecency to this public coming-together of lovers. We seemed to have obtruded ourselves shamelessly. The crowd that gathered outside the church would have gathered in the same spirit and with greater alacrity for a street accident.

[H. G. Welles, *Tono-Bungay*, Pt. 2., Ch. 4]

我々とおよそ無関係な騒音や雑踏のなかでは、こうして愛する二人が晴れて一緒になるということにも、何か不体裁なような奇妙な感じがつきまとった。我々は、恥ずかしげもなくしゃしゃり出てきたように思われた。教会の外に集まった人々の群れは、我々を見たのと同じ気持ちで、もっと機敏に、何か街頭の事故が起これば、見物に集まったことだろう。[H. G. ウェルズ『トーン・バンゲイ』[1909]]

この観察は、鋭く、諦念が漂っている。事態が如何にあるかということである。小説家の口調は、観察して読者にただ説明する者の口調である。誰でも通りに出て行けば見られるものを指差している人間である。事実、小説家がすべてを知っていて読者に伝えるというのは伝統的な確実性——いわゆる小説家の全知——に依存しているが、それは、普通に見られるものは普通に理解され得るという、小説についての作家と読者との間での古くからの約束事の別の言い方に過ぎない。最も劇的かつ恐らく不可避免的に打ち破られたのがこの約束事である。というのも、新しい姿勢がすでに周到に準備されていた。この姿勢は、もはや自信にあふれた傍観者、観察者の姿勢ではなく、ワーズワスにまでさかのぼれる、通りを歩く孤独な人間の姿勢で、傍を通り過ぎる人に神秘、不可解を感じるだけでなく、この繰り返される不確実な不安のうちに、自分自身のよく知っている行動、自分自身の存在<sup>アイデンティティ</sup>感、彼自身の伝達能力までも見失ってしまう人間の姿勢である。

All laws of acting, thinking, speaking man  
Went from me, neither knowing me, nor known.  
[Wordsworth, *The Prelude*, Bk. 7]

行動し、思考し、語る人間の一切の法則が

わたしから離れてしまったのだ、わたしを知ること  
もなく、わたしに知られることもなく。[ワーズワ  
ス『序曲』第七巻]

結果としての作者の意識は、強烈で、断片的で、主観的にすぎないものとなる。しかし、この主観性の中にこそ、その意識は他者[都市を構成する市民]を含み、そして他者は、いまや——現代都市の建物・騒音・景色・臭いとともに——この単一で、競合する作者意識の一部となるのである。このような見方で見られた現代都市を描いた傑作小説がジョイス [1882-1941] の『ユリシーズ』[1922] である。ジョイスの独創性は注目に値する。なぜなら、それは、このような新しい都市観——断片的で、種々雑多で、孤立した見方——を、感覚的に実現しようとして、それを伝えるために必要な、言語の新しい秩序と働きにおける革新イノベーションとなっているからである。

[9] ディケンズの業績は、都市の究極の人間の・社会的関係とは何であるかを示し、同時に、それに問いを發するため、都市生活の慌ただしさ・雑多性・固定点・隠された力を作動させ、さまざまな価値を劇化したことである。他方、ジョイスの業績は、独自のやり方による、ひとつの解体であった。作動の力は内面化され、ある意味は、もはや都市は存在しない——喪失した都市を歩いている一人の人間がいるだけである。『ユリシーズ』[1922] の天才は、それが都市そのものよりも、三人の知性、ブルーム、ステイーブン、モリーの内面を劇化することであり、——三人の相互作用が、軸となって劇が展開するのに必要な緊張関係となっている。しかし、ディ

ケンズの人物たちが、最終的には彼らの世界を変革するようなやり方で、衝突・関係するのに対して、ジョイスの人間関係は別の次元へと移される。各人が他者に対して演じるのは象徴的な役割であり、彼らが究極的に関係せねばならない現実は、ダブリンにおける一日 [6月16日] の入念な日付にもかかわらず、もはや空間でも時間でもない。それは抽象化された——もっと正確に言えば、押し付けられた——男と女の、父と息子の人間関係である。歴史は、この都市にではなく、都市の喪失、関係性の喪失の中にこそある。そして、こうした喪失の物語が、ユリシーズを枠にして結合される。すなわち、『オデッセイア』を詳細に活用することで、ダブリンを観察し、浮かび上がらせるのである。

[10] 20世紀において、大都市での経験は支配的なものになってきた。しかし、どんな都市、あるいは大都市であれ、独立した存在ではない。現代都市が、外面的にも内面的体験の細部においても、集中するのは、依然として一つの社会であり、健全な社会は、それが都市によって支配されている間も、都市そのものを越えて伸び広がる。現代の都市に対する私たちの反応は、その集中的意味には、単なる社会組織を越えた関連性がある。産業・資本主義社会における孤立・疎外・人間関係の喪失として、広く感じられているものの関連性である。現代都市の逆説パラドックスは、人が、このようにして、他の人間存在を最も強く意識する、まさにその場所、また、歴史的に見れば、何よりも交換・伝達・制御の場所であったまさに社会組織の中で、孤独をしばしば感じるということである。

私たちが知っているような現代都市は、本質的には、19世紀の技術革新テクノロジと伝達様式コミュニケーションの産物であり、そのことは現在のような集合体を

要求した。そして、それは、歴史的見れば、すでに時代遅れなのかもしれない。確かに、その内的矛盾は、今や非常に明らかで、動きと抑制の問題で身動きとれない、恐らくは解決不能な都市の問題として現れている。都市の概念には終わりがなさそうである。終わるには都市が文明にとってあまりに中心的だからである。しかし、現在のかたちの産業都市と大都市は、いまだに、時々主張されるような、現代性モダンティの中心ではない。事実上、それらは未完の過去の重荷、生きた重荷である。

最後に、こうした現代都市から私たちが学んだ文学の方法として、現代性の問題がある。生きた個人の死んだ大衆に対する反逆。社会の現実から永遠の神話の世界への逃避。人と物との混同。そして孤立した意識の中での人と物との象徴化。いまだにこうしたものが、現代的思考の特徴として、提供・推薦されているが、経験しるしの徴として、久しいものであるけれども、一時的であり、そのまま承認すべきものではなく、むしろ意識的に教えられ、改めて対決し、まともに検討しなければならない問題なのである。

#### Works Cited

- Alter, Robert. *Imagined Cities: Urban Experience and the Language of the Novel*. New Haven: Yale UP, 2005.
- Brand, Dana. *The Spectator and the City in Nineteenth Century American Literature*. Cambridge: Cambridge UP, 1991.
- During, Simon. "After Death: Raymond Williams in the Modern Era." *Critical Inquiry*, Vol. 15, No. 4 (Summer, 1989): 681-703.
- Jaye, Michael C. and Ann Chalmers Watts, eds., *Literature and the Urban Experience: Essays on the City and Literature*. New Brunswick, N. J.: Rutgers UP, 1981.
- Lehan, Richard. *The City in Literature: An*

- Intellectual and Cultural History*. Berkeley: University of California Press, 1998.
- Pike, Burton. *The Image of the City in Modern Literature*. Princeton, N.J.; Princeton UP, 1981.
- Prendergast, Christopher, ed., *Cultural Materialism: On Raymond Williams*. University of Minnesota Press, 1995.
- Raymond Williams, *Culture and Society, 1780-1950*. London: Chatto and Windus, 1958.
- . "Literature and the City by Raymond Williams." *The Listener*. Vol. 78, No. 2017 (November 23, 1967): 653-656.
- . "Literature and Rural Society by Raymond Williams." *The Listener*. Vol. 78, No. 2016 (November 16, 1967): 630-632.
- . *The Country and the City*. London: Chatto and Windus, 1973.
- . *The Long Revolution*. London: Chatto and Windus, 1961. Reissued with additional footnotes. Harmondsworth, Penguin, 1965.
- Said, Edward Wadie. *Culture and Imperialism*. New York: Knopf, 1993.
- Sharpe, William Chapman. *Unreal Cities: Urban Figuration in Wordsworth, Baudelaire, Whitman, Eliot, and Williams*. Baltimore, MD: Johns Hopkins UP, 1990.
- Social Text*, No. 30 (1992): 3-101.
- Timms, Edward and David Kelley, *Unreal City: Urban Experience in Modern European Literature and Art*. Manchester: Manchester UP, 1985.
- Watkins, Evan. "Raymond Williams and Marxist Criticism." *boundary 2*, Vol. 4, No. 3 (Spring, 1976): 933-946.
- West, Cornel Ronald. "In Memoriam: The Legacy of Raymond Williams." *Cultural Materialism: Essays on Raymond Williams*. Ed. C. Prendergast. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1995.
- Wirth-Nesher, Hana. *City Codes: Reading the Modern Urban Novel*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- 西田 実訳注「英文随筆・レイモンド・ウィリアムズ『文学と都市』」『英語研究』第57巻第2・

「文学と都市」についての考察（1）（楚輪 松人）

3号（1967年2月号）：13-19,（1967年3月号）  
：17-19.

山本和平・増田秀男・小川稚魚訳, レイモンド・  
ウィリアムズ著『田舎と都会』東京：晶文社,  
1985.